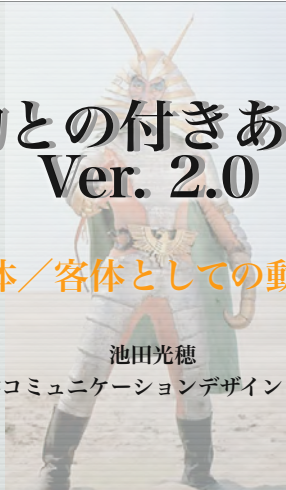


# 動物との付き合い方 Ver. 2.0

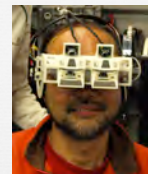
## 主体／客体としての動物考

池田光穂

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター



## 自己紹介



- 池田光穂 (いけだ・みつほ)
- 1956年申(サル)年生まれ
- 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授
- 著書・論文
- 『実践の医療人類学：中央アメリカ・ヘルスケアシステムにおける医療の地政学的展開』2001年、世界思想社
- 『看護人類学入門』2010年、文化書房博文社
- 『認知症ケアの創造：その人らしさの看護へ』2010年、雲母書房

## 要旨

- (1) 「お前は鬼畜だ！」という極めて厳然とした〈客体としての動物〉の地位が、現在、
- (2) 人間が守るべきものとしての「動物」そのものの存在論的価値の浮上に伴い、
- (3) 「俺達は鬼畜かも知れない」という〈主体としての動物〉へと移行すると同時に、
- (4) 人間と動物の間の境界が「かすんできた／薄ぼけてきた (blurred)」世界を、我々 (=人間と動物) は生きている。



- 鳴子 (なるこ) 『和漢三才図会』和漢三才図会 卷第卅五・卅六
- 動物 (雀) と人間が食物 (米) をめぐってライバル関係にあることを示す図

(1) 「お前は鬼畜だ！」という極めて厳然とした〈客体としての動物〉の地位の崩壊の予兆

(1)人間の生理現象を調べるために、人間とは根本的に異質の〈客体としての動物〉を利用する。しかし、実験結果の成果は、生物としての普遍性、つまり人間も共有できる資料として扱われる。両者の矛盾について俺達はあまり深く考えない。

## 供犠獣として実験動物

- 実験ではラット、ネコ、そして霊長類マカク属を使った夥しい数の動物を「犠牲」にして行われてきたことが第一の特徴としてあげられる [LYNCH 1988]。リンチは言う「実験室の研究者たちにとって「犠牲 (sacrifice)」は学術用語である。実験室での手順を示した手順書の中や実験室の実験技術者 (テクニシャン) たちの日常語の中で、「犠牲」[という用語] が、事前・最中・事後で剖検体 (experimental subjects) として利用される実験動物を殺すための様々な一連の手法のことを意味する」 [LYNCH 1988:265]。



ロボコップになった実験動物としての私

## 供犠は丁寧に

- 視覚の神経生理学研究では、画像マッピング手法という動物を使う実験に代替する手法が登場したが、神経生理学の伝統的手法に完全には代替できないために、視覚の神経生理学研究の多くは今日においても実験動物の「犠牲」を抜きにしてはその学術的成果が望めない現状にある。神経科学者は、1匹の動物に対して最新の麻酔技術を駆使して非常に丁寧に「配慮」とも言える最新の注意を払って措置を行っている [池田 2011:265-267]。



ヒューベルとウィーゼルの実験

## 動物慰霊祭は真剣か？

- 我が国の実験動物研究の権威と言われている私のインフォーマントの1人は「動物碑や慰霊祭は本当に日本独自のものだ」と評する。しかし、その実際の儀礼の執行は仏式の簡素なものであり、慰霊祭に参加する人の儀礼にかかわる真剣さはあるものではない。慰霊碑がある場所もキャンパスが離れているせいもあるが、D教授の研究室のメンバーには実際に慰霊祭に参加する人は極めて少ない。つまりモノとしての動物の骸 (むくろ) は「科学的事実」が解明されるまでは丁寧に冷凍庫で保管されるのに比して、もしそれを信じればという話だが「動物の霊」は逆にぞんざいに扱われるか、あるいは容易に忘却されるようにも思える。

## 非人称化仮説の虚構

- この調査を始める前に、実験者たる自然科学者たちは、犠牲獣に対して常日頃からモノを扱うような態度で接していると、それに感情移入しないために、実験がスムーズにいくのだと、当初考えていた。つまり、実験者による動物の非人称化という感情的手続きを無意識のうちにこなしていると考えた。これを非人称化仮説と呼ぶことにしよう。尊厳をもった実験動物をさらに物質のレベルの次元に還元すれば、研究者の道徳的ジレンマが回避されるのではないかと考えたからである。だが……LYNCH [1988] の犠牲=供犠仮説と同様、非人称化仮説も、私が調査した実験室においては通用せず、かつ説得力のないものであったと私は考える。



## 人間と動物

### その連続性／非連続性

- 実験者と実験動物の間に生物学的連続性ならびに存在論的な連続性を認めてしまうことは、客観的「自然」を抽出するために実験に供される動物は、人間とは根本的に異なる位相のもとに存在するから動物実験の対象になるという論理とは根本的に矛盾をおこす。そのことを両立させるためには実験動物に帰される「自然」の性格に相矛盾する2つの意味をもたせる、つまり彼らの間に動物の存在論的意味についてある種の二重性を認めない限り、この現象は理解可能なものにならない

## 実験動物の死の意味

- 動物は飼育舎の中では個性をもつ（疑似的）主体として見られているが、実験室で実験状況や標本の中に固定化されると徹頭徹尾個性を失った生物的客体として取り扱われる。動物の死後、データとして客体化された動物身体は、純粋な（ブラックボックスとしての）生物機械を反映するものとして捉えられる。その意味では実験動物は死後始めてマテリアとしての意味を獲得するわけであるが、生命の連続性／非連続性という観点からも、ここで実験動物の死の意味を考えることは重要な意味をもつ。

## 「自然」の二重性

- 本研究での調査対象となる人々の日常生活にほとんど意識にのぼることのない「自然」の概念は、まずは相矛盾する「自然」の二重性という概念で示される現象として、我々人類学者の前に立ち現れる。一方では（1）科学的事実という用語によって置き換えられており、また他方では（2）探究されるべき「自然」は実験動物と測定機器とのハイブリッドな構成体の中に焦点化されていることを私は主張してきた。

## (2)人間が守るべきものとしての「動物」そのものの存在論的価値の浮上

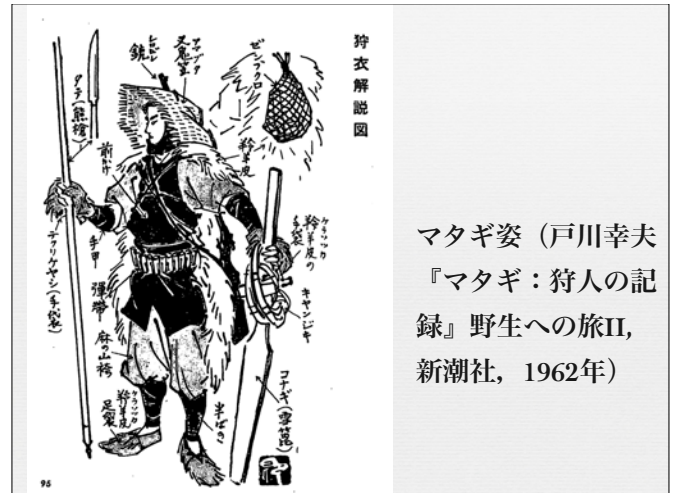
## 主体としての動物

- 生物多様性保全をめぐる議論に登場するツキノワグマとジュゴンという2種類の動物と現代日本人の間の「つきあい方」に関して考察する。これまでの生態人類学と象徴人類学が扱ってきた人間と動物の関係を紹介しつつ、人間がもつ動物に対する菅原和孝の「思い籠め」という認知過程を手がかりにして、ツキノワグマの「抗議活動」とジュゴンの法的「当事者適格」について検討した。そこで明らかになったのは、ツキノワグマとジュゴンに関わる様々なメタファーの交錯があり、それを人間の側のシャドーボクシングの実践と表現できること。そして、メタファーの操作が重要となる想像的關係に与る社会的事実と、個体数の把握や現実の邂逅そして保護管理という存在論的な媒介関係を表象するものとして、この実践を捉えることができると私は主張した。

## ツキノワグマ害獣論争



ツキノワグマ (上野動物園)



狩衣解説図  
マタギ姿 (戸川幸夫『マタギ：狩人の記録』野生への旅II, 新潮社, 1962年)



ツキノワグマの特徴 (岩手県遠野市公式ウェブサイト)

## 狩猟という認知文化

- マット・リドレー [2010:104-106] は人類史において〈文化という状況〉のもとで、最初に登場したのは狩猟道具の発明とその改良であるという。狩猟道具の発明とその改良は、その後の人間と動物の間の相互関係を根本的に変革した。これらの事態と関連するのが、人間の〈他者への情動の投射〉と〈交換〉というコミュニケーション様式にあるという。他者を思いやる気持ちの起源は、現在の我々が信じている共感や同情というセンチメンタルなものではなく、狩猟仲間との協働で重要になる他者が何を考え次にどのように行動するかを推論する能力である。この能力は、ニコラス・ハンフリー [2004[1976]] によると、もはや人間の独占物ではなく霊長類と我々は分かち持つものである。〈他者への情動の投射〉とは、相手を思いやる気持ち、より正確にはコミュニケーションを通して自分の頭の中で〈相手の経験や推論〉を再現 (=追体験) することができることであり、〈交換〉とは、自分にあり相手にないものと相手にあり自分にないものを取り換えることであるが、それらは相互に密接に関連する [リドレー 2010:106-110]。狩猟動物と人間の関係は、文化人類学の研究がこれまで明らかにしてきたように生態学的な有用性の次元を超えたより強い心理的 (あるいは霊的) 結びつきが強調されている。

## 熊の出没

- 2010年10月本州全土でクマの目撃情報や人里への出没さらには人間への危害に関する報道が相次いだ。時事通信のインターネットでは「12府県の4~9月のクマの目撃件数は計6,006件で、昨年同期の約2.7倍に急増。残る2県でも目撃件数や捕獲件数が昨年を大きく上回った」と報じている。石川県では2010年度10月中旬時点で、クマ出没情報は約200件で、前年の同時期の約4倍に相当したという (『中日新聞』2010年10月17日)。

## COP10/MOP10の裏側で

- 日本語ツイッター (twitter) に「生物多様性ボット」という検索エンジンと投稿機能をもったユーザープログラムがかつてあった
- 「各地でクマが出没し射殺されているが、クマ殺しは生物多様性の否定じゃないの?と呟いてみる」
- 「COP10とか開催してるわりには熊をぼんぼん殺してるそんな国につぼん」
- 「COP10でクマ保全やられている方に聞きましたけど、やはり里地里山の崩壊により、さらにシカのルートをクマが使って、人里に下りて来ているとのこと。報道は、そこまで流さない」等



## 熊をめぐるニンゲン間のバトル

- 岡山県美作市は中部日本以西の300の自治体と自然保護団体に呼びかけし同年12月16日に同市で「全国クマサミット」で開催された。約400名の参加があったこのイベントでは、地元の国会議員、県会議員、市議などが来賓として多数参加し、猟友会と関連自治体が主張する危害獣の「殺処分」の権限が知事にあり市町村レベルでの権限がない窮状が訴えられると拍手が上がった。会場で「少数派」となってしまった保護派の人たちの意見表明は、コメントシートでフロア発言を制限され、イベント終了間際にはその抗議の声を上げた参加者が壇上の司会に制止される場面も見られた。……この捕獲後放獣か捕殺をめぐり危険に晒されると考える地元住民は「人間とクマとどっちが大切なのか」と自治体につよく抗議している。

## (3) 「俺達は鬼畜かも知れない」という〈主体としての動物〉へと移行する

## ジュゴンの当事者適格と 平和運動



2010年国際ジュゴン年 (WWF-Japan)

## ジュゴンの当事者適格

- WWFジャパンや日本自然保護協会を中心とする保護活動家たちは2008年10月国際自然保護連合 (IUCN) 総会で採択された「移動性野生動物種の保全に関する条約」(ボン条約)を履行するようにと2009年5月に3万人分の請願署名を(国会議員を通して)衆参両議院に提出した。彼らは2010年7月には辺野古沖で生態調査をおこなった。
- 日本の「環境法律家連盟」は米国の国家歴史保存法 (NHPA) を根拠に、アメリカの国防総省に対して、代替施設の建設は、国家歴史保存法に違反し、同施設がジュゴンに及ぼす影響に「配慮」しなかったとし、(1)同法違反の違法確認、(2)同法を遵守するまで建設関与禁止の差止め、(3)裁判所が適当と認める法的救済を提訴した。

## ニンゲンと動物が同格になるメカニズム

- 直示 (deixis) としてある〈動物名=ツキノワグマ〉を指し示すことは、単にその動物の属性(野生、保護対象、冬眠前に食べる、凶暴、親子の愛情など)の意味の内包だけでなく、その文脈、つまり〈クマ〉の存在の空間的位置であるドングリの実がなる森林などの具体的な生態系をその言葉を聞いた人に想起させるだけでなく、山奥の方位や自然の領域のイメージ、すなわち宇宙論(コスモロジー)における位置などが社会的文脈に応じて、あるいは行為の種類に応じて規定されることになる。したがって宇宙論的直示 (cosmological deixis) とは、多様な人間の宇宙論(コスモロジー)という文脈によって「それ(=動物)」が指し示す本質の定義が社会や文化、場合によっては同一文化の中における行為者によっても異なり、さまざまな可能性のある行為者のリアリティの多様性をうむことを暗示する。

## ツキノワグマとの出会い

- 横山 [2009] の次の文章は、その出会いが如何に轟動的なものであるのかを見事に我々に伝えるものである。  
「偶然、山の中でツキノワグマに出会う。真っ黒な毛並みに光が集まり、黒光りした大きな塊が激しく波打ちながら、一目散に山中に消えていく。一瞬の出来事だ。自然の中に力強い生命力があることを思い知らされる。ツキノワグマは、豊かな自然の恵みを受け生き抜いている生き物たちの息吹を、衝撃的に伝えてくれる動物である」 [横山 2009:129]。
- 一方で魂を打ち震わせるか、魂が凍るかの遭遇がある。

## ジュゴンとの出会い

- ジュゴンは辺野古沖の海中を住み処とする住民というよりもその海域の通過民——歴史民俗学の用語では「漂泊民」が適切だろう——であり、目撃情報も極めて少ないものである。しかし1998年1月13日辺野古沖をジュゴンが遊泳することがヘリコプターから確認され、その映像が放映され地元紙に写真入りで報道された時、反対派の長老ミヤギ翁は「ニライカナイ（＝海の彼方の異界）から使いが来てくれた」と叫んだという〔Inoue 2004:95〕。認識論的な理性が制御する数多くの仮想的な出会いとも言えよう。

(4)人間と動物の間の境界が「かすんできた／薄ぼけてきた」世界を、我々（＝人間と動物）は生きている。

### El hombre perezoso y el hombre zopilote 01

- ある村に怠惰な農夫がいました。彼はトウモロコシ畑で仕事をするのがとても嫌で、いつも奥さんに小言を言われていました。今日も畑で仕事をせず、ぼおーっと空を見上げています。空には高くハゲタカが獲物を探して旋回しています。「ああ、ハゲタカはいいなあ、ああやっつてのんびり空を旋回できて」と怠惰な男はため息をついています。それを聞きつけた一羽のハゲタカは、空から降りてきて、怠惰な男に「おい、そんなにハゲタカがいいのか？俺は人間になりたいんだ。どうだ？俺の着ている衣装と君の衣装を取り換えっこしないか？」と持ちかけました。男は喜んで「本当か？ではそうしよう！」と言って、その話に乗ることにしました。

### El hombre perezoso y el hombre zopilote 02

- ハゲタカは自分の黒い羽根の衣装を、男の人間の姿と取り換えっこしました。怠惰な男は、ハゲタカになり空を悠々と飛ぶことができ、すごく満足しました。他方、ハゲタカ男は、トウモロコシ畑に戻って一生懸命に働き、それまで雑草の生えたままになった畑がすっかりきれいになりました。家に帰ったら、すっかり働き者になった夫に、奥さんが「あんた、どうしてこんなに働きものになったの！」と驚き、それまでの態度とは一変して心から夫に尽くすようになりました。それからというものハゲタカ男は畑でますます一生懸命働くようになりました。

### El hombre perezoso y el hombre zopilote 03

- 他方、空を飛んでいた今はハゲタカの元農夫は、最初は喜んで空を旋回していたものの、やがてそれに飽き、お腹が空いてきました。しかし仲間と共に降り立った食事の場所とは、ごみ捨て場であり、食事とはうち捨てられた獣の腐肉やゴミでした。「うへーっ、これはたまらん」とハゲタカの元農夫は、再び空に舞い戻り、現在は農夫のハゲタカ男のところに戻ってきました。ハゲタカ男に「もうハゲタカの生活は飽きたので、ふたたび衣装を取り換えてくれないか？」と言いました。勤勉になったハゲタカ男は「俺は人間になり畑で働くことに満足している、君は怠惰だからハゲタカになることを望んだのだろう」といってとりあってくれませんでした、とき。

## ハゲタカ男の読み方

- 勤労を旨とする農民への、よくある勤勉・勤労のすすめという訓話。なぜなら怠惰な生活をし〔怠惰な生活をしているように見える〕ハゲタカ生活に憧れてしまうと、ハゲタカの甘言に乗ってしまい、とうとう最後は「本物の」ハゲタカになってしまい腐肉を喰らうことを余儀なくされるのだ、ということはこの民話は我々に諭す。
- その民話的想像力の中で語られている存在論的位相である。すなわち動物と人間が「衣装」を変えるだけで変身（変換）できるということであり、また人間と動物は、思考し自分の意思をもち行動することで、我々とは別個の資格をもった「独自」の存在である



## セリオフィリーの問題

- 古代から現在にまで西洋思想のなかには、人間中心主義への反省——あるいは種間相対主義への誘惑——が伏在し、しばしば動物の行動様式や性質を人間のそれらよりも高い価値をおいて讃美する観念複合体 (ideal complex) が見られるという [ボアズ 1990:139]。これをセリオフィリー (theriophily, 動物優越論) といい提唱者の思想史家のジョージ・ボアズは、これをプリミティビズム (未開 [崇拜] 主義) の形成にも貢献した思潮で古代ギリシャにもその淵源を遡れるものであるとしている [BOAS 1933:1-2]。

## 動物優越論テーゼ

- （1）動物は人間と同じくらい理性的である（仮にそうでなくても動物は人間よりも「幸福」だという付帯条件がつく）。
- （2）人間にとって自然は継母かもしれないが、動物にとっての生母は自然であり、それゆえ動物は幸せである。
- （3）動物は人間よりも道徳的である [ボアズ 1990:139]。

## ハゲタカ男の別の教訓

- ハゲタカの立場からメソアメリカの寓意を理解する。高い空から人間を長く観察していたハゲタカは意思の弱い怠惰な人間と交渉して両者の衣装を交換し、結果的に人間の奥さんを得ることができ、それまでの怠惰な評判だった農夫の名誉を挽回してあげて、その後幸せに暮らしたというのが、ハゲタカの言い分。
- 近代理性が要求する人間の内面と外面の一致という窮屈な倫理的規範に思い悩むことなどは、人間とハゲタカの衣装の交換の寓意によって、簡単に克服することができるが見事に示されている。

## 「憑依」が示す人間中心主義

- 人間の魂が動物のそれにハック (= 乗っ取られる) される人格の変化に関する現象を「憑依」という術語で我々人類学者は表現してきた。この場合、不幸なことに、人間の魂が抜け落ちてあるいは脇に退けられて「より低級の」動物の魂にハックされるのがこの現象だと表現されてきた。そして憑依された身体は、乗っ取った魂により動物らしく振る舞うという。

## 反近代の啓蒙ものがたり

- ハゲタカの物語は、この憑依概念とはかなり趣を異にして、機知に富むハゲタカが怠惰な農民の衣装と交換することで、農民の怠惰の汚名を雪 (すす) ぎ、どんな人間でも社会的に更生することができるという、反近代的な啓蒙——言うまでもなくこれは撞着語法である——の寓意として特異な主張をしているように思える。この主張によると、人間は外側に現れる行為こそが重要であり、その内実を占める魂は、人間本来のものであろうか動物のものであろうか、どのような種類のもので別にかまわれないことになる。すなわち「魂に貴賤なし」である。

他にも話したいことが山ほどありますが、話し手中心主義はよくないので、ここで皆さんとの対話を楽しみたいと思います。

ところで御両人どこか似ていない？



タイトルセクション

タイトルセクション

表題

✦ テキスト